

ある台湾人少女の帝国後

—— 嶺月の文学活動と脱植民地化 ——

洪 郁 如

はじめに —— もはや「国民」ではなくなった「少国民世代」

1945年の日本の敗戦により、台湾は中華民国の統治下に置かれることになった。帝国日本の「少国民」として育てられた子どもたちは、その後、どのように戦後を迎えたのだろうか。本稿は、女性作家、嶺月のライフ・ヒストリーとその文学活動を通して、台湾の「少国民世代」の戦後を考察するものである。

「少国民」とは何か。『大辞林』第三版では「少国民」を「小学生程度の、年少の国民」と定義し、「第二次大戦中に用いられた語」であるとする。初等教育を受ける年齢層の子どもたちが、児童としてではなく、年少の「国民」と称されることにより、国家の戦争動員の対象となっていった、そのような時代を如実に表現した語である。

しかしながら、いわゆる「少国民」としての実体験を有する世代の年齢層は、辞書中の定義よりも広い。世代的にみれば、実際、戦後に「少国民」の体験を語った人々の年齢は、この用語が流行り出した第二次大戦期に小学生だった人々には限られないからである。終戦時の小学児童のみならず、このときすでに旧制高校に在学中か、あるいは高等女学校を卒業していた人たちも、その少し前の「少国民」体験の語りに加わっている。つまり、戦争記憶に関連する著書、回想録、語り部の活動などで「少国民世代」の語りを構成した主体は、日中戦争期から太平洋戦争期の小学生にまで跨っており、およそ1920年代後半から1930年代半ばまでに生まれた世代である。

さらに空間軸からみれば、こうした「少国民世代」の歴史体験の共有範囲は、現在の日本の国家サイズに限られるものではなく、元日本帝国の支配領域のすべてに跨っていた。ここから、帝国日本の植民地であった台湾でも同世代の子どもたちは

共通の経験を持っていた。だが、戦後、帝国の解体と植民地の放棄により、かつての小さな「皇国民」は、もはや「国民」ではなくなり、その存在は戦後日本「国民」の集合的な記憶から消えていったのである。

植民地台湾の「少国民世代」を分析するにあたり、日本内地の時代的文脈とやや異なるのは、「日本」と「中国／中華」の二つの要素を同時に考慮しなければならない点である。つまり、日本教育を受けてからほどない1945年に終戦を迎え、中華民国教育への接続を余儀なくされたということである。本稿の考察対象である1934年生まれ嶺月は、終戦時に小学生だった世代⁽¹⁾の一人である。

台湾の少国民世代を研究する際に注意を払う必要があるのが、こうした「世代」内の微妙な差異である。嶺月を含む1945年の時点で小学生であった者たちにとっては、戦後に中華民国教育に接続していく過程とは、引き続き残りの初等教育を終え、中等教育へと進学していく過程と重なる。完全なる「フルコース」で日本教育を受けた姉妹に当たる年齢集団とは異なり、幼少期に教え込まれた「日本」と、その後、中等・高等教育段階において求められた「中国／中華」は、アイデンティティ、言語の面で異なっており、それぞれの学習年数によって微妙な違いも生まれてくる。台湾人の主体性の再構築と脱植民地の観点から「日本」と「中国／中華」の双方に跨った「少国民世代」の歴史的な経験を解明することが本稿の課題である。

まず、嶺月のライフ・ストーリーを把握しておこう。嶺月は、植民地台湾の「少国民世代」の一人だった。本名は丁淑卿といい、1934年に台中州彰化郡鹿港街（現在の彰化県鹿港鎮）の名門丁家に生まれた。1941年に鹿港第一国民学校に入学し、五年生の時に終戦を迎えた。1947年に彰化女子中等学校初中部（中学部）に入り、1950年には台北女子師範専科学校の普師科⁽²⁾に進学した。1953年に卒業後、高雄市の大同小学校に教員として配属され、一年後に両親のいる彰化県の溪湖鎮という町にある湖東小学校に転任した。三年後の1957年、南投県鹿谷郷の名門林家出身の林惟堯との結婚を機に退職し、台中市に住むことになった。その後、長らく子育てと家事に専念した彼女は、1968年、35歳の頃、『国語日報』への投稿をきっかけに執筆活動に入った。以来、1998年に逝去するまでの約30年間に、200冊近くの訳書、著書などを出版することになる（林惟堯、林武憲、林宜和編2004、262-268、320-329頁⁽³⁾）。

嶺月が本格的に文学活動を始めたのは、40代に入り子育てが一段落した時期だが、その文章はかなり早い段階から高い評価を得ていた。嶺月の作品は、第一に、文学のジャンルからいうと、女性を対象にして家庭、育児、自己啓発などについて

書いたものと、児童を対象とした文章が主である。第二に、文学の形式からいうと、エッセイ、翻訳、小説創作を中心とする。そのうちエッセイと翻訳の本数が圧倒的に多い。そしていずれの主題、創作形式においても「日本」を抜きにしては語れないという特徴も指摘で

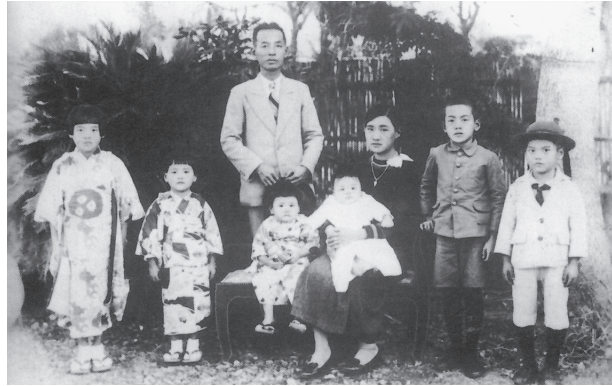


写真1 鹿港丁家 1938年。左から長女淑霜、次女淑卿（嶺月）、父丁瑞乾、三女淑芳、母施梅磔、膝上は三男明聡、長男明星、次男明適。

きる。以下では、主婦文学への接近、日本植民地経験の可能性という二つの軸を嶺月の文学活動の特徴として位置づけていくが、まずはその成立条件として「少国民世代」が抱えていた言語問題について検討しておきたい。

一. 「国語力」の問題

台湾史研究において指摘されてきたのは、戦後の国民党政府が進めた急進的な言語政策が、日本語を主要言語とする台湾知識人から表現手段を奪ったという点である。「国語」である中国語政策の推進、学校現場や新聞・雑誌における日本語の禁止などにより、台湾人の言論空間が狭められたというのが共通認識となっている。また文学史研究では、日本統治期に活躍してきた台湾人作家の多くが、戦後、日本語による創作が不可能になったため、文壇から身を引いたり、あるいは積極的に中国語の習得に取り組み、中国語による創作への転換を試み始めた点が指摘されてきた。本稿は以上のような指摘を否定するものではないが、従来の指摘が無意識のうちに、終戦時にすでに日本語の「国語力」を身につけていた青年・成人の知識層を前提としていたことには注意を喚起したい。

終戦時に小学生であった年齢集団にとり、「国語力」の習得は、まだ道半ばだった。もしも上の世代がすでに確立された言語表現の無効化を迫られたとするならば、一つ下の世代は、中途半端な「国語力」を置き去りにしたまま、初習外国語のように新たな「国語」に直面したのだといえる。本稿の主題に即していえば、特に文学的な創作においては、より高度な「国語力」が求められる。だが、「国語力」の達

成度は、日本統治が終了した1945年にはこの世代の多くにとって、特に学年が下になればなるほど、十分なものではなかった。終戦時にすでに中等学校卒業以上の教育歴を持っていた姉妹、親世代とは異なり、小学生だった世代の「国語力」は未完成のまま、戦後を迎えることになった。文学創作に即して考えれば、終戦時に小学生だった世代は、1945年前後の言語環境の転換により痛手を被った姉妹や親世代のような「大人の」日本語を駆使することは元々できなかった⁽⁴⁾。上の世代からは、日本語も中国語も手中にした「バイ・リンガル」だと羨まれることもあるが、実際には双方ともに中途半端な「セミ・リンガル」となりかねない問題を抱えてもいた。

日本統治期に生まれた世代にとって、「国語力」としての日本語も中国語も、わずかず数学年の差がそれぞれの習熟度に与えた影響は大きい。嶺月はインタビューの中で、確かに日本教育を四年間受けたものの、自身の中国語力は日本語力よりも高い、と述べている。いっぽう5歳年長の彼女の夫は、日本語力のほうが中国語力よりも高いという（謝斐如1993, 93-96頁）。

家庭環境や生い立ち、個人の資質や努力など、他の要素による個人差も当然、存在する。中国語文の場合は、漢学の素養をもつ上の世代が嶺月の家族内にいた。終戦後、祖母と伯父はいち早く、日本時代に秘蔵していた漢文の教本を探し出し、一族の子弟に教授し始めた。また、父親は戦前には国民学校教員、戦後は校長を務めていた。戦後初期に日本人教員が離職し、中華民国政府が教育機関を接收するまでは、地元の各学校の校長を招集し、自前の中国語教材を編集したうえで、それをを用いて現場の台湾人教員と生徒に授業を行った⁽⁵⁾。彼女のペンネームも父親が付けたものである（謝斐如1993, 93-96頁）。嶺月は戦後、中学時代に作文コンテストで最優秀賞を獲得している。女子師範の学歴、結婚前の教歴、退職後の読書量と創作量から見ても、彼女の並々ならぬ中国語の習熟ぶりが伺われよう。

二. 主婦文学への接近と文壇デビュー

戦後初期、台湾出身の女性作家の不在という問題は、台湾文学史の先行研究においても意識されている。1950年代には、葉陶（1905年生まれ）、陳秀喜（1921年生まれ）、楊千鶴（1921年生まれ）らの台湾出身の女性作家が一時期、活躍したものの、言語と政治の制約によりにわかに活躍の場を失い、文壇から身を潜めていった。同時に、中国大陸で高等教育を受けた女性作家群が、台湾で徐々に頭角を現し

始めた（王鈺婷 2012, 19-20 頁）。1950 年代以降の台湾女性作家の系譜を見ると、1980 年代の女性文学⁽⁶⁾を担う施淑青（1945 年生まれ）、李昂（1952 年生まれ）、平路（1953 年生まれ）、朱天文（1956 年生まれ）、朱天心（1958 年生まれ）などの戦後世代が登場するまでには、かなり大きな断層が存在している。そうした中で、中国大陆出身者によって構成された戦後の 1950 年から 1980 年までの女性作家群において、1930 年代の台湾生まれで、終戦時に小学生であった世代の一人である嶺月の存在はひときわ目を引く⁽⁷⁾。

主婦文学の仲間入りは、嶺月が文学の道を歩む重要な第一歩となった。

初めての投稿「母姉会」が『国語日報』の家庭面に掲載された 1938 年から 1970 年代の半ばまで、彼女は毎月欠かさず投稿を続けていた。定期的な投稿は、当時、同紙の家庭面の編集長を務めていた黄和英と後任の薇薇夫人（1932）の目に留まった。二人は彼女の原稿を毎回、細かく添削したのみならず、その執筆活動を絶えず激励した。添削済み原稿と元の原稿を見比べたことによって、文章の技巧を磨き、自身の進歩につながったと彼女は回顧している。のちに嶺月を『聯合報』コラムの執筆者に推薦したのも薇薇夫人であり、彼女をコラム作家の道へ導くことになった（謝斐如 1993, 93-96 頁）。主婦文学という舞台上で生じた文学界の女性たちには、ある種の連帯感が存在していたのではないか。

主婦文学とは、恋愛、婚姻、家庭、育児、女性の自己啓発など主婦の生活経験を、女性の視点から創作したものであり、1950 年の女性文学の一ジャンルとして位置づけられている（王鈺婷 2012, 99, 114 頁）⁽⁸⁾。家事労働を兼ねながらの女性作家の作品は、自身の体験から発想したものが多く、その作品は同じ経験を持つ広範な女性読者の共感と呼んだ。文学史研究においては、これは当時の女性文学の小説に顕著な傾向として指摘されるが、実のところ新聞の文芸面に掲載された女性作家のエッセイやコラムも同様の特徴を持っていた。

その中で、1970 年代半ばにコラム作家としてデビューした嶺月の作風は、明らかに主婦文学の流れを汲むものであった。1976 年に『聯合報』で週一回のコラムを担当するようになった際、できるだけ日常生活の話題を取り上げる、という執筆方針は薇薇夫人からの依頼であった。これについて嶺月は「私なら主婦たちを勇気づけることができる、と薇薇夫人は考えたのかもしれない」と回想している（嶺月 1979, 1 頁）。薇薇夫人の本名は樂菝軍、1964 年に『聯合報』で設けられた「薇薇夫人」は、台湾の新聞史上、女性向けコラム欄（婦女專欄）の草分けとされる。このコラム名は同時に彼女のペンネームにもなった。1964 年から 30 数年も継続した

この欄により、薇薇夫人は台湾を代表する女性コラム作家の地位を築くことになった。コラムは、女性の家庭問題、人生相談などを主とし、専業主婦の価値を肯定し、家庭と仕事の両立に悩む女性らに寄り添いながらも、従来の男女性別規範を受け入れ、主婦として家庭内の任務の完遂を優先すべきだと主張した。つまり、現代社会における女性の能力を肯定し、それを発揮すべきものだが、あくまでも家庭生活に支障をきたさない範囲に止めるべきという、いわゆる「現代版の婦徳教育」、「古典新女性」的な思考であったと指摘される（紀琇雯 2005, 1, 33, 36-37, 49, 71 頁）。薇薇夫人の知遇を得たことは、彼女が文学界に参入する重要なきっかけであった。ただし、彼女の価値観が、文壇の主流を成していた家庭や社会のジェンダー規範に合致していたことも彼女の成功を後押しした理由の一つであったろう⁹⁾。

1976年、嶺月は『聯合報』で「和風集」というコラムの担当を開始した。その内容は、このような女性作家の主流の観点を忠実に踏襲していたが、同時期の他の女性コラム作家とも共通する点でもあった（紀琇雯 2005, 72-79 頁）。1979年、二年余りの間に発表したコラムの文章を集めて書籍として出版し、その後も『和年輕媽媽聊天兒（若いお母さんたちと雑談して）』（嶺月 1982）、『做個內行的媽媽（プロのお母さんになるため）』（嶺月 1986）、『經營家庭不忘經營自己（家庭を「經營」しながら、自分を「經營」する）』（嶺月 1993）、『妙媽媽・巧孩子（素敵なお母さん・賢い子供）』（嶺月 1994）などを著した。彼女の逝去後に出版された記念文集には、薇薇夫人以外に、林海音、郭良蕙（1926年生まれ）、丹扉（1926年生まれ）、簡静惠（1941年生まれ）、蔣竹君（1938年生まれ）など、当時の台湾の著名な女性作家たちとの記念写真が載せられている。彼女は『国語日報』社を自分の「文壇の実家」と表現していた（林惟堯、林武憲、林宜和編 2004, 204-206, 208 頁）。

1980年までに、ほぼ中国大陸出身の女性作家によって占められた台湾の女性文学の世界で、嶺月が自らの足場を獲得できたのは、主婦文学という時代の必要に合致した創作路線を歩み、コラム作家から出発し、人脈を築き、自らの可能性を積極的に開拓したからだとわかる。次節では、彼女が多数の女性作家の中で自身の特色を打ち出す事ができた理由について、その「少国民世代」としての戦前経験の役割との関連で論じていきたい。

三. 日本植民地経験の可能性

多くの女性作家がひしめく中で、嶺月が文壇で独自の地位を獲得できたのは、翻

訳家としての仕事による部分が大きかった。彼女が着目したのは、日本文学、とりわけ児童文学であった。1976年にレギュラー執筆者として『聯合報』のコラムを依頼される以前、彼女が中訳した神一行の『桜ヶ丘第六小学校』（番町書房、1975年）が『国語日報』に掲載されたことは、その知名度の向上を決定的なものにした。その後、1976年から1983年の間に、日本で広く知られる名作物の翻訳をほぼ毎年のように世に出した。橋田寿賀子の「となりの芝生」（もとは1977年から『婦人倶楽部』連載バージョンと推測される）、古田足日の『宿題ひきうけ株式会社』（理論社、1979年）、平岩弓枝の『午後の恋人』（文藝春秋、1979年）、大石真の『チョコレート戦争』（理論社、1965年）などが含まれる。

日本の文学作品を中心に精力的な翻訳活動を行い得た理由については、彼女が日本教育世代に属していたことに帰されがちだが、実はその日本語力も自らの努力により補われたものだった。この点について、台湾の児童文学研究家の李潼が的確に指摘している。「事情を知らない人は、『彼女は完全な日本教育を受けたからだ』と誤解しているが、1934年生まれの嶺月は、日本植民政権が台湾から去った時、実は僅か12歳だった。あの政権が激変した『この国語はあの国語にあらず』の時代には、混乱と困惑に陥ることなかった点では幸いだったが、12歳の鹿港の少女は、自学自習の不断の努力がなければ、『完全な日本教育』などあり得なかっただろう⁽¹⁰⁾。時代に翻弄される「少国民世代」の無念さについて、嶺月はのちに発表した自伝的小説の中で、中学校一年時の中国大陸出身の担任教員に語らせている。

「あなたたちはなんて可哀想なんだろう。生まれた時は台湾語、入学してからは日本語、そして日本語をまだ完全に習得しないうちに、今度は中国語を学ばされる。次々に思わぬ事態が起きて、勉強の機会と時間をずいぶん無駄にってしまった」（嶺月1993, 194頁）。

無論、植民統治期の初等教育で習った「国語」は、この世代の日本語の基礎となったが、この土台以上のものを獲得するためには自習しかなかった。嶺月自身も二つの言語をめぐる努力の経験について多く述べている。夫婦二人の日本語力と中国語力が異なるため、『読者文摘（リーダーズ・ダイジェスト、Reader's Digest）』を愛読する夫は、いつも自分用の日本語版と妻用の中国語版を同時に購入した。それは同じ文章の日本語と中国語対訳を勉強するのに役立つという（謝斐如1993, 95頁）。彼女は同時期の日本の新聞・雑誌、小説、書籍などを多読し、辞書を引き

ながら日本語の自修に力を入れていた⁽¹¹⁾。日本語を通して接した外国である日本に関する情報、知識などは、まず、文学作品の翻訳に活かされた。対象となったのは、同時代日本の小説、児童文学がほとんどである。彼女の仕事を通して台湾社会で広く知られるようになった著名な日本の文学作品も多かった。

次に、嶺月のエッセイ、コラムにおいても日本の報道記事、新聞・雑誌、書籍が取り上げられ、日本の社会問題と思考様式などについて頻繁に言及されている。彼女の言葉によれば「いくつかの日本の家庭小説や学校小説に感銘を受けるたび、これらを翻訳して国内の主婦たちに読ませてあげたいという衝動に駆られた」（嶺月1987, 4頁）。コラムと同名の書籍『和風集』⁽¹²⁾に収録された119本のエッセイの中には、日本を事例として挙げたものが24本あり、また、自分の日本時代の実体験に触れたものもあった。

だが、彼女のこの特徴は、親日やノスタルジーに結びつくようなものではなかった。日本の文化や社会動態などを紹介しつつも、決して日本を台湾の優位に立たせるものではなかった。あくまでも台湾の読者に異なる思考様式、参照枠組みを提供する目的であり、テーマによっては日本を反面教師とし、批判的な論調の文章も多数見られた。

嶺月の小説『聡明的爸爸』と『老三甲的故事』は、翻訳とエッセイが圧倒的に多い彼女の仕事の中では珍しく自伝的な作品として、特に注目しておきたい。1993年に発表された『聡明的爸爸』では、彼女は自分の父親を物語の展開軸として、日本時代に過ごした幼少期の記憶を再構成していく。「少国民世代」の脱植民地過程という視点から見て、非常に興味深いものである。例えば「お正月の舞台衣装」という話では、日本統治期には一、二月のうちに、「日本年」と「台湾年」という二つの正月を祝う習慣につき、日本のお正月には彼女ら子供たちがキモノを、台湾のお正月には大人たちが伝統服を意図的に着用していた場面を、対照的に描き出している。

まず日本のお正月について話しましょう。学校は休みになりますが、生徒たちは先生のお宅に新年の挨拶に行きます。恵ちゃんはお母さんが作ってくれた綺麗なキモノを着て、日本式の下駄と白い足袋を履きました。下駄には穴が空いていて、鈴が二つ飾ってありました。歩くと鈴の音が鳴るので、面白くて鼻高々でした。

しかし居間に出ると、お祖母さんたちに笑われました。「なんとおかしな舞

台衣装なの。日本のキモノの何がそれほど美しいと言えるのか。私たちの小さい時に着ていた新調の衣装は、縁飾りがあり、刺繍があり、本当に細やかで美しかったよ」(嶺月 1993, 92-93 頁)

しかし台湾のお正月になると、

早朝の祭祀では、お父さんたちは中国式の長衣、お母さんたちもチャイナドレスを着なければなりません。子供たちは中国式の服を持っていないので、洋服を着ていいですが、日本のキモノは認められません。そうしたら恵ちゃんたち女の子は、反撃の機会を掴みました。「あら、大人もお正月に舞台衣装を着るのね、何だかおかしい」。「お前たちは何を言っているんだい」と恵ちゃんのお父さんがたずねると、恵ちゃんは「この前の新暦のお正月に日本のキモノを着たら、おばあちゃんたちに、舞台衣装みたいで、おかしいと笑われたの。いま大人は普段着ない服を着て年を越そうとしてるけど、これが舞台衣装じゃなければ何なの」と答えました。それを聞いてみんな大笑いしました。(嶺月 1993, 99 頁)

「舞台衣装」という絶妙な比喻は、戦後という時点に立つ「少国民世代」の一人が、記憶の中の「日本」と「中国」に対して採った距離感を表している。子供の和服にせよ、大人の中国服にせよ、実は普段着ではなく、所詮、性質の違う二つの正月に合わせた台湾人の舞台衣装に過ぎない。そして、作家は世代間の「日本式」と「中国式」の異なる主張を対立や矛盾に発展させることなく、家族の笑い声の中に丸く収めたのである。

『老三甲的故事』は、台湾人の少国民世代の戦後を繊細に描き出した作品である。書名が「元三年甲組の物語」を意味し、戦後の中学校で過ごした青春を対象とするものである。1990年に『国語日報』の少年文芸面で連載が終了した後、1991年12月に単行本として出版された。自序の冒頭には「これは四十数年前に本当にあった出来事である」(嶺月 1991)と記されているように、



写真2

主人公の丁ちゃん（原文：阿丁）は、嶺月の本名丁淑卿の略称であり、表紙と背表紙に嶺月本人の写真を用いていることから、著者は本書の自伝的な性格を隠そうとはしていない⁽¹³⁾。執筆の経緯からみてわかるように、作家自身を含むクラスメートや同世代の集団的経験を描いたものだといえよう。その中では、姉世代から受け継いだ日本時代の慣習に対する批判的な視点が興味深い。

例えば「寄宿生のお嬢様ごっこ」という話では、戦後の学校生活に残された日本の先輩と後輩の上下関係に違和感を示している。

廊下で上級生に会うとお辞儀するだけではなく、道を譲らなければなりません。洗面所でも、上級生を優先させなければなりません。……宿舎のルールが多い。一学年上の先輩には何々姉さんと呼び、二学年上の先輩にはお姉様と呼ぶなければなりません。いつでもどこでも会うたびにお辞儀をしなければならなかったのです。忘れたら怒られて睨みつけられて、失礼だと注意されました。（嶺月 1991, 38 頁）

制服から私服に着替えたなら、同級生か上級生か区別できるはずがありません。お姉様と呼ぶべきなのに、お姉さんと言い間違えても怒られました。（嶺月 1991, 40 頁）

このような違和感が示される一方で、日本統治期の歴史的経験が逆にプラスに活かされる場面も自然な筆致で描かれている。冬服を持っていない中国大陸からの教員が、寒さに耐え忍んでいることに女生徒たちが気づいた時のことである。

「クラス全員で力を合わせて先生にセーター一枚を編んであげてを思いついた理由を知っている？」と心欣が言いました。「日本時代に親戚、友人や知り合いが徴兵されたとき、母と知り合いのおばさん達は必ず武運長久と書かれた一枚の白い布に、赤い糸を縫いつけて結び目を作るのです。刺繍糸でこの四文字を浮き出させて、出征する人にお守りとして持たせるのです。これは日本人の習俗で、千人針と呼ばれます。人々からの愛と祈りを込めたものなのです」。（嶺月 1991, 128-129 頁）

戦時中の千人針の動員経験が、中国大陸からの教員にセーターを編む発想となっ

たのである。戦争期に千人針を送った相手は、前線の日本兵だったが、戦後の彼女たちが千人針に倣って作ったセーターの受け取り手は、国民党軍の経歴を持つ中国人教員だった。今昔の贈り物の相手は敵対していた両者であったにも関わらず、生徒の純粋な気持ちで千人針の歴史的経験は転用されていた。戦時中の青年・成人世代に比べると、児童だった世代においては、政治体制の移り変わりに対する受け止め方と意識の度合いが異なるとわかる。社会がどう変わっても、素直に生きていく少年少女の姿が嶺月の作品には反映されている。

四. 捉え直し続ける「中国」と「中国人」の意味

日本の植民地統治が終わり、いわゆる「祖国への復帰」を喜ぶ台湾人の多くは、差別的構造からの脱却と、主体性の回復への期待が高かったが、それは間もなく現実によって裏切られた。国民党政府の失政、腐敗、二・二八事件を皮切りに展開された虐殺と白色テロは、台湾人社会を失望の奈落に陥れた。このような台湾戦後史を語る主軸を、さらに世代要素を含めて分析するなら、「少国民世代」の特異性が浮かび上がる。「日本教育」により育てられた前の世代、「中華民国教育」により育てられて「日本教育」と無関係な後の世代とは異なり、日本時代から中華民国時代への劇的な転換は、ちょうど自己形成に関わる成長期に重なっていた。政治の移行期に相前後して全く異質な「国民教育」を受けてきた少年少女の一人一人が、個人や国家のアイデンティティという重い課題を、人生の早い時期に時代によって容赦なく突きつけられたということである。

小説『老三甲的故事』のなかでは、日本人ではない「我々」は、「実は中国人」であると「新たに認識した」。まず、積極的に「中国」を知ることからスタートしている。

「先生、大陸のことを話して！」二年になった甲組の学生たちは、授業中でも休み時間でも、機会があればいつもこのように教員にせがみました。なぜなら、小さい時から皆、大陸のことについては全く知らなかったからです。十代になって突如、「私たちは日本人ではない、中国人だ。中国大陸は我々の本当の祖国だ」と言われ始めました。問題は、中国大陸がどこにあるのか、そこの気候、風土人情と習俗などは、台湾と同じなのか、ということだ。これら全てに、十代の中学生は好奇心を覚えました。ところが、当時は関連する書籍もほとんど

なく、大陸について紹介するテレビ番組も映画もありませんでした。外省籍の先生の話が唯一の情報源だったのです。(嶺月 1991, 135 頁)

ここには主体性を取り戻し、「中国人」になるために努力する姿が見られる。興味深いのは、歴史担当の台湾人教員が、「国籍」をめぐる中学一年生の生徒たちの困惑を解くために、「台湾を知る」ことから始めた一話である。

彼は丁ちゃんのお父さんの友人でした。漢学の教養は深いですが、北京語(国語)は話せませんでした。鹿港訛りの台湾語しか喋れませんでした。生徒たちはこの先生の授業が好きでした。なぜなら、彼はみんなのレベルと理解力を知っていたからです。初日の授業で、先生はため息をつきながら言いました。「君たちはこの歳になってやっと自分が中国人であることを理解した。なぜ台湾はこれまで日本に属していて、そして今どうやって祖国に戻ってきたか、みんなきっと知りたいだろう。自分の国籍でさえはっきりさせることができなければ、中国の歴史を勉強できるはずはないだろう」。そこで教科書を置いて、先生はオランダ統治期からの台湾の歴史を語り始めました。(嶺月 1991, 123 頁)

同じ戦前経験からの「ハンデー」を持つ台湾人教員こそが、生徒のレベルと理解力を承知しており、寄り添う事ができた。それが人気の理由であろう。中国大陸を知らないどころか、郷土台湾の歴史さえも知らなかったというこの描写は、少国民世代の著者による率直な告白であろう。だが、新しい国語である中国語を話せないという「残念な」理由で、この先生は代用教員の職から去っていったという。

嶺月の作品に現れた「過去」の日本経験への解釈、そして戦後中華民国の「いま」の位置づけは、一党独裁下におけるメディアと学校教育での国民党政府の公式見解から外れるものではなかった。しかし、それぞれの作品の公表時期に注意してみれば、微妙な変化があるのに気づく。1980年代初頭に政府機関の依頼を受け、彼女は「近代中国青少年通俗読物叢書」の『革命耆勳：譚人鳳的故事(革命の功労者：譚人鳳の物語)』(丁淑卿 1982)、「近代中国兒童連環図画」叢書の『光復節的故事(光復日の物語)』(丁淑卿 1983)の二冊を執筆している⁽¹⁴⁾。シリーズは国民党政府の文化機関主導下に、愛国心、民族精神の養成を目的とする読み物であり、その主編は当時の国民党党史会主任委員、秦孝儀であった。二つの叢書に共通する

内容は、小中学生の目線から、中華民国や国民党の政治家、文化人の事績、中華民国と国民党の歴史を讃えることであった。事前に周到な編集方針が敷かれていたことは言うまでもない。

通常、中華民国史を軸とする台湾の『光復節的故事』は、帝国の「少国民世代」だった作家によって、如何に語られたのであろうか。小学校の台湾人教員が生徒に「30数年前の本校には、自分が何国人か分からない五年生の子がいました……」と話す場面から始まる。「あの時代、本当に愚かな子は自分が何国人か疑うことさえできず、日本人だと信じていた」という。植民地期における内地人との差別待遇、戦争期の皇民化運動、日本精神の強要、反抗する生徒への暴力を「暗」として描く一方、「明」として中国を表す「唐山」への憧憬、「蒋介石先生と宋美齡女史は偉大な人物で、台湾を苦しみから救い出してくれる」と繰り返し、国民党と中華民国政府への期待を大いに強調した。日本統治期における差別と同化の圧力、そして中国への期待は事実だが、そうした一面しか語れなかった体験は、中華民国の抗日、国民党の台湾統治の正当性を支持する政府の公式的な言説に回収される結果となった。

これに対し、上述した1990年前期の二冊の自伝的小説では、国民党と中華民国を讃える教科書的・訓話的な要素は希薄となっていた。特に『聡明的爸爸』では、植民統治期の日常の「日本」と「中国」とは、ほぼ同等な比重と語り方が採られている。その創作意図は「序」で示したように、孫世代に祖父母が過ごした日本統治期を伝えるという点にあった。日本統治期の話にとどまらず、戦後、国民党統治期における自分の世代の物語を、その心情や認識も含め忠実に提示していた。台湾文化に親しみ、戦争に懐疑的な態度を持つ日本人教員の話、そして国民学校教員である父親が空襲の激しい日に当直し、校長室の特別な箱に納めている教育勅語を命がけて守った話、さらに機銃掃射にあった際、祖母や母が信仰する観音さまではなく、日本の天照大神に祈る主人公の様子も丁寧に描かれている。

このように「光復」という台湾人の脱植民地に関する一党独裁体制下の最も模範的かつ普遍的な語り方を残しながら、「日本時代」と終戦前後の記憶を正面から、大幅に紡ぎ込まれた結果、主人公が復唱する「正確な政府見解」自体が換骨奪胎され、そこに改めて思考する空間、再解釈の余地が生み出された。物語の終わりには、中華民国政府を喜んで迎える台湾人の光復の情景があるが、そこには少女の密やかな困惑と不安も書き込まれている。

海外から帰還した台湾人日本兵の行列が近づいてきました。台湾から出征し

た時、見送りの親戚・友人は日本の国旗を掲げていましたが、台湾に戻ってきた今、迎えに来た人々は変わりませんでした、その手に振られているのは中国の国旗でした。……

恵ちゃんはなぜか悲しみが湧き上がって来ました。天照大神のご加護を願った空襲時を思い出しました。彼女は急いで「青天白日が高く照らし、世界が明るくなり」と歌い出し、内心の悲哀を抑えようとしました。日本の皇民と自称した自分の愚かさ、無知と恥辱を忘れようとしました。「光溢れる世界には煩惱はない。革命は成功した。一切の強権と悪の勢力は打倒された。みんな平等で特権もない。楽しくて悠々とする」。恵ちゃんは昼も夜の夢の中でも歌い続けました。賑やかな光復日が早く来るように、不愉快な少女時代が早く消えるように祈りました。「私は台湾人。私は中国人」と彼女は全世界に告げたかったのです。(嶺月 1993, 183 頁)

戦後から 1980 年代まで、台湾住民は通常、「中国」「中国人」といった語彙を用いて自称していた。これは嶺月の作品の中に頻繁に現れる呼称でもある。ただし、1980 年代の作品の中の「私は中国人」は 1990 年代の「中国人でもあり台湾人でもある」へとアイデンティティの転換もみられる。戦後世代に教え込まれた「私は中国人である」との自意識は、台湾政治大学選挙研究センターが実施する台湾民衆アイデンティティ調査(1992 年)によれば、すでに 25.5% しかなく、「私は中国人でもあり台湾人でもある」が最多数の 46.4% を占めていた⁽¹⁵⁾。嶺月の作品に見られた変化は、台湾社会の政治アイデンティティの推移に対応したものとわかる。この後「私は中国人でもあり台湾人でもある」は 1996 年の 49.3% をピークに減少し、その後、「台湾人である」と度々拮抗して、2008 年にはついに「台湾人である」を選択した者がこれを上回った。

『老三甲的故事』の終わりには、作中の人物が政治と距離を保つ慎重な姿勢、そして作家本人が自らの意見、感情、立場の表明を控える姿勢も垣間見える。

……民国 38 (西暦 1949) 年 8 月の夏休み中、世の雲行きが怪しくなり、時局が非常に不安定になったことを感じました。……「先生、共産党は台湾に侵攻してくるでしょうか」と私たちは担任に聞きました。「怖がらなくていいよ。我々には英明な総統がいて、またアメリカという世界の正義の化身もいるから、

台湾は危険ではない。時局がどのように変化してもあなたたちは心配しないでいい。勉強に専念すればいいよ。台湾は日本の植民地から光復して、祖国に戻ってきた。あなたたちはすでに何年も勉学，知識を追求する貴重な時間を浪費し，犠牲にしてきた。今はもう彷徨わないで。勉強が何よりも大事だ。もし国を愛し，国のために何か貢献したいならば，なおさら一生懸命勉強して自分を高めなければならない」。(嶺月 1991, 205 頁)

1980年代の作品では語られなかった中国兵に対する台湾人の印象，国民党の赤狩り，白色テロなどの政治事件も，1990年代の自伝的小説には登場するようになった。

しかしながら時局はますます悪化し，汚い格好の軍隊が次々と大陸から台湾に撤退してきました。全省各地の寺院と学校はほとんど軍隊の駐屯地となってしまいました。(嶺月 1991, 210 頁)

先生が突然失踪したのは，夜中に諜報機関の憲兵に連行されたからです。数日後に釈放されて学校の宿舎に戻ってきましたが，心を動揺させたあの恐ろしい出来事は，先生を慕う「元三年甲組」の生徒たちの記憶に深く刻まれました。(嶺月 1991, 213 頁)

政治の混乱，学校現場と教員たちが国家の暴力に巻き込まれた事件を正面から取り上げながら，作家はそれ以上，深く踏み込むことはなく，終始，控えめな筆致で記憶の中の一場面を終止符を打っている。

1996年7月24日，嶺月は台湾大学病院で病気のため亡くなった。

児童文学作家の林武憲は，嶺月が逝去する前のある出来事について次のように回想している。

ある日，電話の中で彼女は，児童文学賞の審査を担当したことを話してくれた。ほかの審査員たちを説得することができず，中国の作家に最優秀賞を取られてしまったという。受話器の向こうから彼女の高ぶった気持ち，不満と無念さが伝わってきた。明らかに，いつもの冷静で優雅な彼女とは違っていた。私は驚き，そして敬服する気持ちになった。台湾の子供の城が，簡体字部隊によって



写真3

陥落したのに、多くの者は気にも留めなかった。一部の新聞社が中国人作家の作品を出版した数は、台湾人作家のものよりも多かった。彼女は早くから、国内の児童文学創作の苦境を見抜いていた」(林武憲 2004, 63 頁)。

これは、中華人民共和国からのしかかってきた強い圧力を前にして、台湾を主体とするアイデンティティを、嶺月が文学活動においてひととき強く打ち出した瞬間でもあった。

夫の林惟堯は、「歳月が流れ、嶺月がこの世を去ってからまもなく六年になる。この間、世界は

大きく変わり、とりわけ彼女が深く愛した台湾では、その変化はさらに激しかった。台湾の作家を育てるためには、各種の文学賞は大陸と台湾が別々に行うべきだと、彼女が生前に努力し再三、呼び掛けていた問題も、少しずつ進展が見えはじめた」(林惟堯, 林武憲, 林宜和編 2004, 11 頁) と、早逝した妻が時代の変化を目撃できなかったことを惜しんでいた。

おわりに

本稿では、一人の少女の帝国後を、半世紀以上を経た「いま」、改めて振り返ってみた。戦時中に小学生だった「少国民世代」自身が残した文献資料が少ない中で、嶺月の生涯と文学活動は、帝国の子供達の脱植民地化過程の解明に重要な示唆を与えてくれる。

「少国民世代」の一人だった嶺月の脱植民地の歩みが、ライフ・ヒストリーと文学作品を通して示されている。そこには、戦時中の植民地台湾で「天皇陛下の小さな臣民」として学校教育により育てられた幼少期、戦後の中華民国教育に一所懸命、世代のハンデを克服しながら成長していった青少年期、そして中国語を母語とする大陸出身者が主流を占めた文壇で、自らの地位を獲得してきた足跡があった。

台湾社会の戦後は、確かに国家政策の次元では中華民国により代行された脱植民地化の過程であったが、個人の次元ではより複雑な様相を呈した。台湾という歴史の舞台上で忘れ去られた元帝国日本の子供たちにとって、植民地期から戦後の時代変

遷は、「日本」と訣別して「中国」に接続されるという単線的な変化ではなかった。台湾という地で、「日本」と「中国」はそれぞれ重層的な意味合いを持ち、個人の内面世界において、両者の外部化と内部化が絶えず入り混じりながら進んできた。それは対決か忘却か、肯定か否定か、のような二項対立で捉えられるものではない。思考し、戸惑い、試み、模索することによって徐々に主体性の形成に至る過程こそが、同世代の共有した歴史的経験であったと思われる。

※ 本稿は、2018—2022年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「植民地台湾『少国民世代』の戦後史に関する基礎研究」（研究代表者：洪郁如、課題番号：18K11809）による研究成果の一部である。

※ 本稿は国際シンポジウム「〈帝国〉日本をめぐる少女文化」（名古屋大学、2019年3月8日）における筆者の報告の一部をもとに、大幅な改稿を加えたものである。執筆過程では、一橋大学大学院言語社会研究科の星名宏修教授に有益な助言をいただいた。また文献資料の収集などについては台湾国立師範大学台湾語文学系博士課程の邱比特氏に御尽力をいただいた。記して謝意を表したい。

注

1. 文中の「小学生だった世代」という用語は、「初等教育在学中の生徒だった世代」を指す便宜的な表現である。日本統治期の初等教育機関は、台湾人児童を対象とするのが公学校、日本人児童を対象とするのが小学校であった。同時に台湾人子女の中にも、国語常用家庭であるなどの条件で小学校への入学が許可される者もいた。また1941年の国民学校令の公布にともない、学校名はいずれも国民学校に変更された。厳密に言えば、この時期の児童は「小学生」ではなく、「国民学校生（国民学校の生徒）」であった。本来ならば、世代単位で論ずる際に、「国民学校生だった世代」や「初等教育在学中の生徒だった世代」と称す方が正確であるが、前者は読者に馴染みが薄く、後者もややひどい印象があるので、一般的に分かりやすい「小学生だった世代」という表現を採用している。
2. 台北女子師範専科学校：https://women.nmth.gov.tw/information_68_39810.html 1950年当時、中学校卒業生を対象とした三年制の師範学校。普師科とは、一般の国民学校教員の養成を目的とした国校師資科の略称。
3. 嶺月の著作目録について、管見の限り、以下のもの林武憲「創作及翻譯並重——嶺月研究資料目録」が最も完全なものである。（林武憲2004、20-35頁）
4. 戦後に中学一年生になった世代も、戦争期に正常に授業が行われなかったため、同様にこの問題に悩まされている。「実際、習っていたのは13歳までだから、そこで止まっている」、「だから、子どもの言葉しか言えない。大人の言葉はね、本で見るとぐらいでね、使っ

- たことないですよ。だから、大人の言葉は言えないんです」と中学校の上級生の日本語は「我々よりまし。上です」「だいぶ違う」と打ち明けた。(佐藤貴仁 2014, 8 頁)。
5. この二つのエピソードは、自伝的小説『聡明的爸爸』(嶺月 1993) に記されている。
 6. 台湾女性文学について、陳芳明 (2015b) の第 23 章を参照。これ以前、文壇における台湾出身者としては、林海音 (1918 年生まれ) と欧陽子 (1939 年生まれ) がいた。林海音の父親は台湾出身だが、彼女は日本生まれで 2 歳の時に父親と共に中国に渡り、北京で 27 年間に暮らしていた。台湾に移ったのは 1948 年のことであった。欧陽子は終戦時にわずか 4 歳であり、日本教育を受けた世代ではなかった。(陳芳明 2015a, 339-340, 389-390 頁)。ここから、二人の経歴は日本の植民地教育を受けた嶺月とは異なる。
 7. 施忻妤 (2009) の修士論文で取り上げられた女性作家 21 人の内、台湾出身者は 1933 年、高雄生まれの林玉敏 (ペンネームは林立) ただ一人である。当該論文の主たる研究対象は児童文学の創作者であるためか、嶺月については残念ながら触れられていない。同じ少国民世代に属す両者の比較は別稿に譲りたい。
 8. 1950 年代の女性文学のこうした傾向は、当時国民党政府の文化政策の下で生まれ形成され、文壇の主流を占めた「反共文学」と密接な関係を持っていた。(陳芳明 2015a, 297-301 頁)。
 9. 1998 年、薇薇夫人は嶺月への追悼文の中で二人の出会いについて追懐している。「20 数年前のことだろう。私が家庭面の主任編集を務めていた頃、台中からの一通の原稿が届いた。署名は嶺月、筆跡が非常に整っていて麗しかった。編集者は一般的にこのような原稿を好む。なぜなら目に優しいからだ。そしてその内容にもさらに魅かれた。なんと彼女は主婦に新たな生活スタイルを提案していたからだ。なぜ朝から家の掃除をして混雑する市場に買い物に行かなければならないのか、と文章は問いかけていた。一日の最も貴重な時間は、自らの向上のために使うべきだ。読書したり新聞を眺めたり、何かを書いたり、お茶を飲んだり、音楽を聴いたりして、自分の精神生活を充実させれば、主婦は無知で醜いおばさんにならないだろう。なんとという先見性のある前向きな見解だろう。私はその文章を、ほとんど手を加えず、そのまま掲載させた。その後、家庭面では彼女は読者の支持を得て人気の書き手となった。」(林惟堯, 林武憲, 林宜和編 2004, 207-209 頁)。いわゆる主婦の視点からの文学路線は『国語日報』に投稿する最初の時期から見られたとわかる。
 10. 李潼「嶺月の限時專送」(林惟堯, 林武憲, 林宜和編 2004, 221 頁)。
 11. 嶺月「三頭六臂」、初出は『国語日報』1976 年 9 月に家庭面、嶺月 (1982) 所収。または嶺月 (1993, 172-173 頁) を参照。日本語の自修に関する回想は彼女のエッセイ、著書全般に頻出する。
 12. コラム「和風集」は、嶺月の夫の林惟堯によって命名されたものであった。(嶺月 1987, 4-5 頁)。日本語の「和風」から取ったものと想像されるが、実際の命名の理由について現段階では確認できない。
 13. 陳欣欣「一位最令人懷念的老三甲同学」(林惟堯, 林武憲, 林宜和編 2004, 245 頁)。
 14. 二つの叢書はいずれも第一期から第三期まで刊行された。
 15. 「臺灣民眾臺灣人／中國人認同趨勢分佈 (1992 年 06 月～2019 年 06 月)」政治大學選舉研究中心, <https://esc.nccu.edu.tw/course/news.php?Sn=166#> 2019 年 8 月 31 日アクセス。

参考文献

- 王鈺婷 (2012) 『女声合唱——戦後台湾女性作家群の崛起』台湾文学館
- 紀琇雯 (2005) 「女性專欄作家在台湾的興起：以薇薇夫人為主軸 (1964-1987)」台湾, 高雄醫學大學性別研究所碩士論文
- 佐藤貴仁 (2014) 「現在を生きるかつての「日本人」(2) —— 母語を奪われた人 —— その2」『交流』No. 874, 7-12 頁
- 施忻妤 (2009) 「台湾六〇, 七〇年代女性作家童書寫作研究 (1960-1979)」東海大學中國文學研究所碩士論文
- 謝斐如 (1993) 「稱職主婦, 長青樹作家：嶺月默默耕耘成果斐然」『中央月刊』第 26 卷第 9 期, 93-96 頁
- 陳芳明 (2015a) 『台湾新文学史 上』東方書店
- 陳芳明 (2015b) 『台湾新文学史 下』東方書店
- 丁淑卿 (1982) 『革命耆勳：譚人鳳的故事』近代中国出版社
- 丁淑卿 (1983) 『光復節的故事』近代中国出版社
- 林惟堯, 林武憲, 林宜和編 (2004) 『嶺上的月光』健行出版社
- 林武憲 (2004) 「創作及翻譯並重——嶺月研究資料目錄」『全国新書資訊月刊』2004 年 7 月号, 20-35 頁
- 林武憲 (2004) 「從嶺月到「嶺上的月光」」『彰化藝文』第 26 期
- 嶺月 (1979) 『且聽我說——和風集』聯經出版社
- 嶺月 (1982) 『和年輕媽媽聊天兒』信誼基金出版社
- 嶺月 (1986) 『做個內行的媽媽』大地出版社
- 嶺月 (1987) 『跟主婦朋友談天』財團法人洪建全教育文化基金會
- 嶺月 (1991) 『老三甲的故事』文經社
- 嶺月 (1993) 『聰明的爸爸』文經社
- 嶺月 (1993) 『經營家庭不忘經營自己』海飛麗出版公司
- 嶺月 (1994) 『妙媽媽・巧孩子』健行文化公司
- 李昭容 (2002) 『鹿港丁家之研究』左羊出版社